

WHOでのお仕事



WHOインドオフィス
NCD (Noncommunicable Disease: 非感染症疾患) Team Lead

瀬戸屋 雄太郎 (せとや ゆうたろう)

2023年5月より現職。2004年東京大学にて博士号取得、国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所勤務を経て2011年にWHOに入職。

WHO でのお仕事

私は現在、WHO インド国事務所に於いて、NCD（非感染性疾患）チームのリーダーとして、主に生活習慣病対策に取り組んでいます。昨年5月、インド政府は2025年までに7500万人の高血圧および糖尿病患者に治療を提供するという「75 by 25 ロードマップ」を掲げ、全国規模で高血圧・糖尿病対策を強化しています(1)。これは世界でも例を見ない大規模なNCDおよびプライマリヘルスケアの拡充事業であり、WHOは主要なパートナーとしてインド保健家族福祉省（Ministry of Health and Family

Welfare: MoHFW）および各州政府を支援しています。

インドでは依然として母子保健や感染症対策が重要な課題である一方で、急速な高齢化や中間所得層の増加に伴う肥満率の上昇などが影響し、NCDによる死亡が全体の7割を超えるようになりました。そのため、NCD対策はますます急務となっています。また、インドの保健医療は28ある各州の責任であり（実際には中央政府と州政府の制度が複雑に絡み合っています）、WHOは多くの州にNCDコンサルタントを配置し、州政府に対し密接に支援を行っています。

このプログラムは、2018年より

WHOがMoHFWや他のパートナーと共同で実施していた「India Hypertension Control Initiative (IHCI)」を基盤としています。各州ごとにエビデンスに基づく簡潔な治療プロトコルを策定し、それに基づいたトレーニングをプライマリヘルスケアの医療従事者に提供しています。また、プロトコルで定められた治療薬がすべての医療施設に確実に供給されるよう、流通および調達の整備を進め、地域および医療施設での高血圧・糖尿病のスクリーニングを通じて対象者を診断し、アプリを用いた記録や治療の継続の追跡をしています。このモデルは大きな成功を収め、現在は「75 by 25 ロードマップ」のもとで対象地域の拡大が進行中です。

7500万人という治療目標人数は、世界で20番目に人口の多いタイの総人口を超えています。これだけ多くの人々に高血圧・糖尿病の治療を提供し、血圧・血糖値をコントロールすることで、脳卒中、心疾患、腎不全といった関連疾患の予防が期待され、結果として身体障害や早期死亡を減らし、健康寿命の延伸が図られると期待しています。

これまでのWHOでの経歴

私は元々メンタルヘルスを専門としており、国立精神・神経医療研究セン



写真1 WHOトンガでのCOVID-19ワクチン接種キャンペーン



写真2 WHOトンガオフィスのスタッフと



写真3 インドマディヤプラデシュ州でのフィールド訪問

ターで勤務していた際に JPO（Junior Professional Officer）試験に合格し、2011 年からとして WHO ジュネーブ本部で勤務することになりました。JPO 制度については他の方も触れているので詳細は割愛しますが、日本人が国連に勤務し、キャリアを築くために非常に有効なシステムであると考えています。

WHO 本部では、精神保健・薬物依存部で 3 年間、Mental Health Gap Action Programme (mhGAP) (2) という、メンタルヘルスをプライマリヘルスに統合するという当時の旗艦事業をはじめ、様々なプログラムに従事し、WHO の仕組みやプログラム運営について深く学ぶ機会を得ました。

その後、2014 年にフィジーにある WHO オフィスに異動し、太平洋諸国のメンタルヘルス増強を支援するポストを担当しました。フィジーでは、本部での経験を活かし、国レベルでのプログラム実施を主導する役割を担い、太平洋の小国を飛び回る多忙な日々を過ごしました。医療従事者の数が絶対的に不足しているうえ、アメリカやオーストラリア、ニュージーランドへの頭脳流出といった課題も抱える小国ならではの難しさがありましたが、各国の独自の状況に合わせた対応が求められ、非常に充実した経験となりました。

2017 年にはトンガに異動し、引き

続き太平洋諸国のメンタルヘルス支援を行いつつ、WHO オフィスの所長として、トンガ保健省の全般的な支援を担当しました。トンガは人口約 10 万人の小国ですが、私が滞在していた間にサイクロン、はしかの流行、新型コロナウイルスのパンデミック、そして 2022 年の火山噴火といった多くの危機に直面しました。新型コロナウイルス対応では、政府と一丸となって水際対策とワクチン接種に取り組み、市中感染が発生する前に 90%以上の接種率を達成することができました。ボートで小さな島々を巡り、予防接種を行った経験は特に思い出深いものです。最終的にトンガでは、新型コロナウイルスによる死者は 12 名に抑えることができました。

将来 WHO を目指す方へ

WHO と一口に言っても、そこには多様な役割があり、保健の専門家に限らず、コミュニケーション、ロジスティクス、財務、人事、IT など、さまざまなバックグラウンドを持つ人々が働いています。また、オフィスによって業務内容も異なります。私自身も、WHO 本部から太平洋のサブリージョナルオフィス、そして最も小さな国オフィスから最も大きなオフィスへと環境や役割が大きく変わり、そのたびに新たな学びを得ながら、日々奮闘して

いるところです。

WHO で働いてみて感じたのは、日本で一定の専門知識を持ち、さらに英語で意思疎通ができれば、WHO や他の国際機関でも十分に活躍できる可能性が高いということです。日本人が一般的に持つ責任感や真面目さ、調整能力は、WHO でも高く評価されています。

日本では国際保健に興味を持つ人がまだ少ないのですが、一人でも多くの方にこの分野に関心を持っていただけると嬉しいです。大変ではありますが、間違いなくやりがいがあり、楽しく充実した仕事です。

引用文献

- 1) India: 75 million people with hypertension or diabetes on standard care by 2025. <https://www.who.int/southeastasia/news/detail/18-05-2023-india-75-million-people-with-hypertension-or-diabetes-on-standard-care-by-2025>
- 2) Mental Health Gap Action Programme (mhGAP). <https://www.who.int/teams/mental-health-and-substance-use/treatment-care/mental-health-gap-action-programme>